



謹賀新年

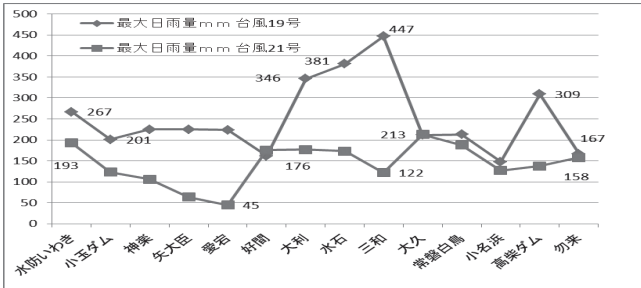
昨年はお世話になりました。改めて御礼を申し上げます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年は台風19号・21号と本市に甚大な被害をもたらしました。被災された皆様に改めてお見舞いを申し上げますとともに、生活再建に懸命に努力されている被災者の皆様に敬意を表します。1日も早い生活再建が実現できるよう、支援の拡充に向けて努力してまいる所存です。

台風19号は、史上最大の降雨量

地球温暖化によって、大型化した台風19号は暴風よりも大雨をもたらす台風となり、凄まじい雨量が本市を襲いました。それにより夏井川・鮫川・好間川の堤防が決壊し、尊い人命が奪われ、5,985世帯に及ぶ住宅が床上・床下の浸水するなど、住宅や農地に甚大な被害をもたらしました。

最大日雨量 10/12 10/25 (福島県)



今後の台風への備えと避難を

台風15号・19号・21号は温暖化による突発的な異常気象ではなく、これからは恒常化していく気配があります。

この度の台風で、天気予報の早さ、正確さとハザードマップの正しさについても認識されました。こうしたことを生かした避難のあり方など、改善すべき点も浮き彫りになりました。

今後、こうした台風が常態化することも想定した備えが不可欠になっています。

台風19号・21号最大時間雨量 (福島県)

	雨量観測所名	水防いわき	小玉ダム	神楽	矢大臣	愛宕	好間	大利	水石	三和	大久	常磐白鳥	小名浜	高柴ダム	勿来
台風19号	最大時間雨量mm/h	39	36	27	27	22	27	42	45	69	36	28	30	44	21
	降雨日(10/12)時	22:00	22:00	22:00	22:00	17:00	18:00	19:00	22:00	19:00	19:00	18:00	22:00	18:00	17:00
台風21号	最大時間雨量mm/h	46	45	29	17	14	49	53	49	27	51	49	46	42	43
	降雨日(10/25)時	19:00	20:00	19:00	20:00	20:00	19:00	19:00	19:00	19:00	20:00	19:00	19:00	19:00	19:00

安全を優先した河川管理を放置

台風19号により国管理河川で12か所、県管理河川で128か所もの堤防が決壊しました。本市においては9か所が決壊しました。

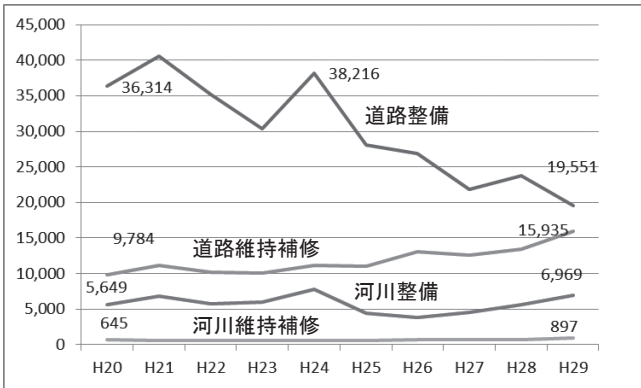
今回の洪水によって「堤防整備」「河川敷に繁茂する樹木の伐採」「土砂の撤去」「堤防の浸透対策」などを放置してきたことが浮き彫りになりました。

極めて少ない河川予算

今回の被害に関して、過去最大の降雨量は想定外としても、治水対策を後回しにしてきた人災とも言えます。河川の予算は、下図のとおり道路関係に比べると極めて少ないのが現状です。今後、税金を適正に治山治水事業に投入することが、国土と国民を守ることになります。

道路・河川事業予算の推移 (福島県)

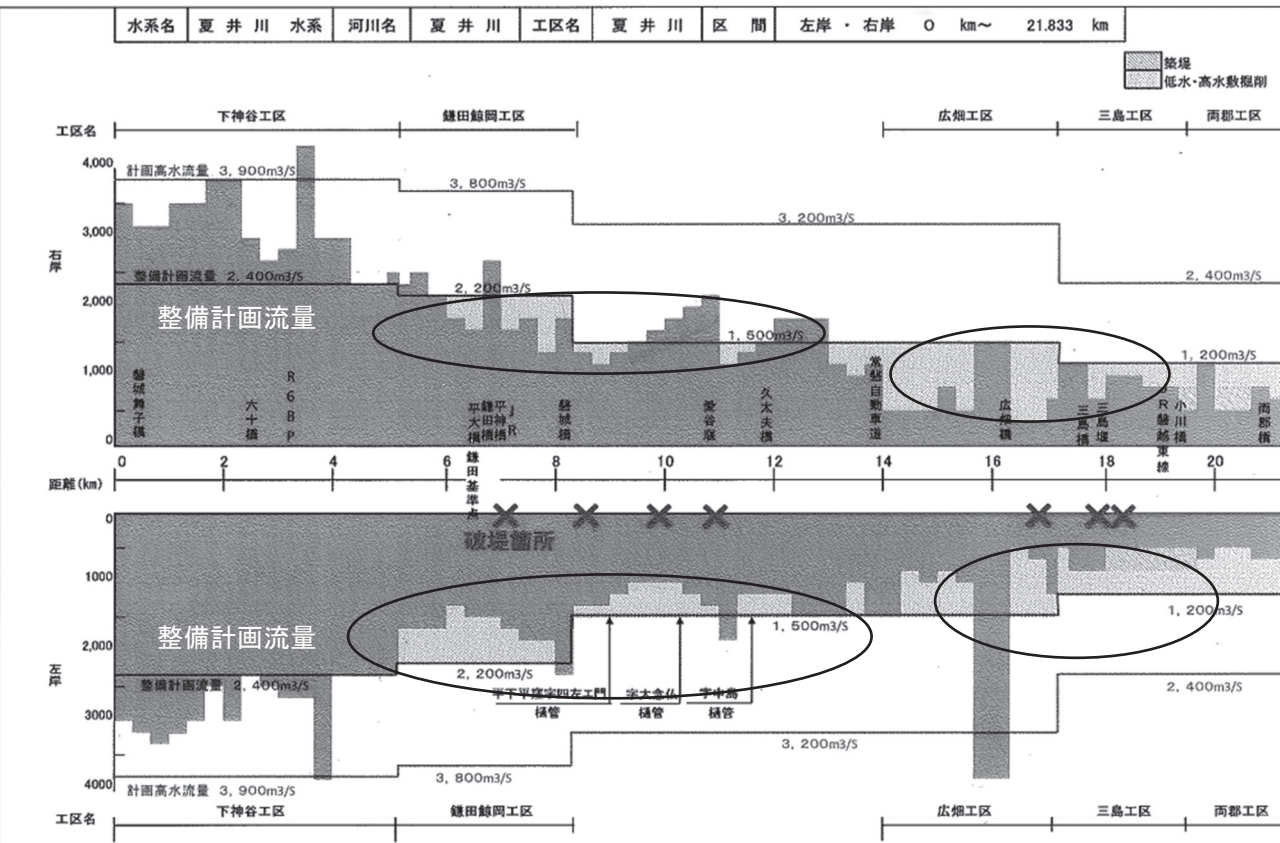
単位: 百万円



夏井川流下能力図

いわき建設事務所作成

令和2年1月



○印の中にあるグレーのところは計画よりも流下能力が不足していた所です。したがって堤防の決壊の原因のひとつとも考えられます。

「夏井川は一旦怒れば、人命・財産をひと呑み」

この度の水害を契機に、改めて志賀伝吉氏の著した「夏井川」を読んでみました。志賀伝吉氏は、はしがきに「夏井川は一旦怒れば、人命・財産をひと呑みする恐ろしい川であるが、喜びも悲しみもわかしあってきた母なる川であり、また聖なる川であった」と記しています。

夏井川の明治以降の洪水の歴史を見てみると、明治23年(1890)2月・6月に前代未聞の大洪水、大正11年(1922)2月に稀に見る大洪水で後世までも有名な洪水として伝承されとあります。昭和に入っても水害はたびたびあり、昭和16年7月(1941)の大洪水と記されています。

近年では、昭和52年(1977)9月、昭和61年(1986)8月、平成元年(1989)8月に大水害が発生しています。

昔から30年に1回程度は大水害に見舞われていました。

川は流れやすく整備すべき

上図のように、この度の台風19号による堤防の決壊は、流下能力が不足していたところに集中しています。特に右岸は整備計画流量(太線)を確保できていないところの下平窪に集中しており、その場所が破堤しました。

小川も流下能力の不足している右岸が決壊しています。この度の災害は未曾有の降雨量をもたらしたものであることは言うまでもありませんが、河川管理の問題点も浮き彫りになっています。

堤防は土と砂、調査して強化を

次への備えは、堤防の嵩上げだけではなく、計画的に川床の掘削・浚渫をこまめに行うことと併せて、堤防の強化が不可欠です。堤防は河床の掘削した土と砂で盛って作っています。洪水の際に越水が起これば、土と砂で出来ている堤体は簡単に浸食されます。平窪地区の堤体も砂で出来ていました。

県は堤防の地質調査を実施し、弱いところから堤防強化対策をすべきです。

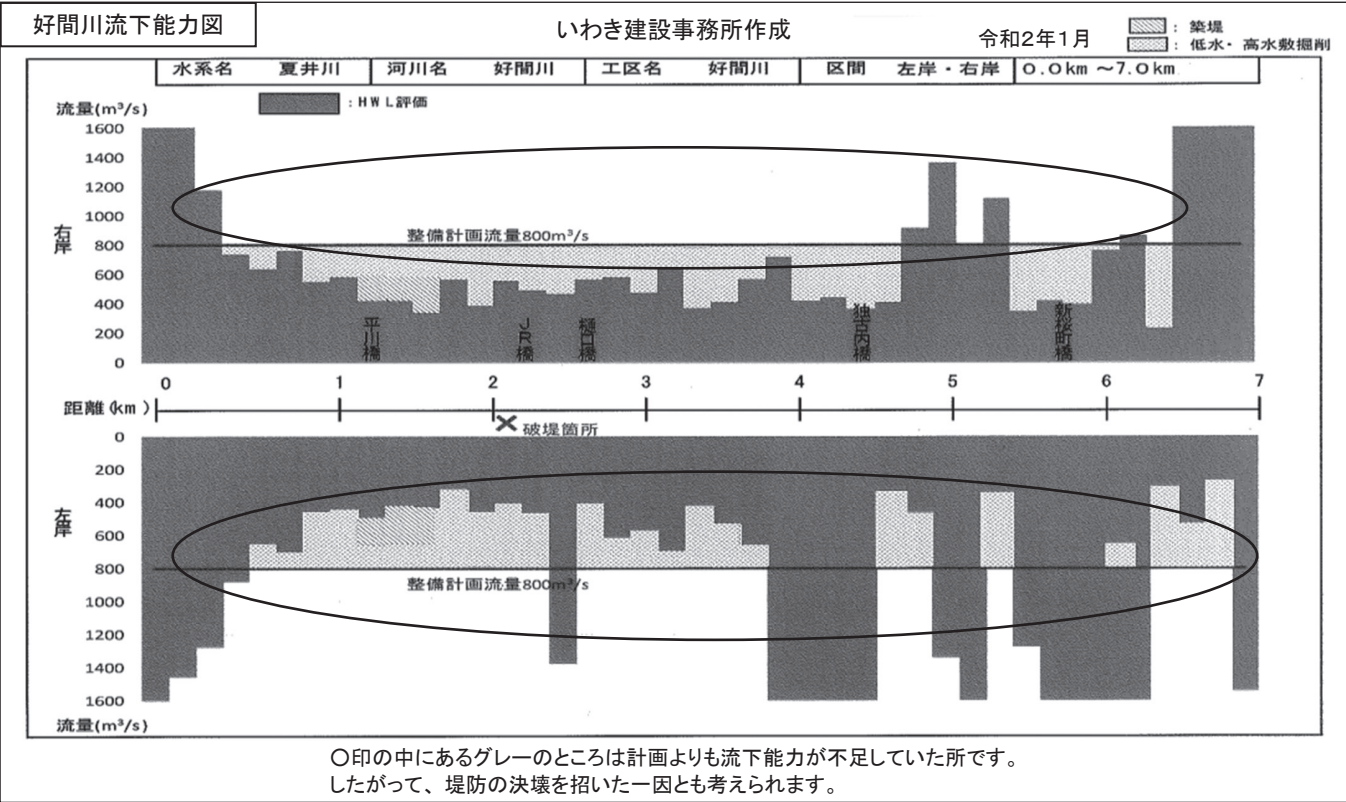
治山を放置した結果が水害を招く

1950年、木材の関税がゼロとなり、外材輸入に押され、中山間地の木材収入は激減し、大半が限界集落となりました。政府の経済効率重視政策の結果、山の木は放置され、間伐も下枝刈りも行われなくなりました。うっそうと生い茂る人工林は光を通さず、下草も灌木も生えずに地面は脆くなり、保水力が雑木林と比べ段違いに劣った結果、降った雨は急斜面を一気に小河川に流れ、夏井川等に流れ込みます。為政者が力を注ぎ込むべきは治山治水でしたが、山を治めずに放置してきた結果、水源涵養機能は徐々に低下し、水害を招いたとも言えます。

水田のダム機能の低下

水田が減り、水田の保水力も急激に減っています。1978年から減反が行われ、その結果、中山間地の機械化も大規模化もできない水田は耕作放棄地として激増してきました。本市の耕作放棄地（畑も含む）は、1985年の253haから2015年の1,987haと約8倍に増えています。

好間川流域も左岸の今新田において堤防が決壊しました。ここも下図の通り、整備計画流量より大幅に流下能力が不足しています。また堤防の未整備のところもあり、水害対策が急務となっています。



日本学術会議の2005年の計算によると、水田を中心とする農業の多面的機能は、洪水防止(3兆4,988億円)、河川流況安定(1兆4,633億円)、土砂崩壊防止、土壌侵食防止等、全体で8兆2,226億円としています。これらの機能も急速に減退しています。

30数年前に危険を警鐘乱打

志賀氏の「夏井川」によれば、夏井川が現在のような連続堤を築造したのは昭和7年からです。この時から二級河川として改修を進めてきましたが、河川敷内の私有地を買収しなかったため「松林・杉林が出来、河川敷地は荒れ放題」と記しています。現在は河川全体の30%超を買収しています（河口から川中子付近まで、上流は未買収）。志賀氏は「公共の利益のためには、直ちに監督官庁は行政命令で伐採すべきである」と警鐘乱打していました。

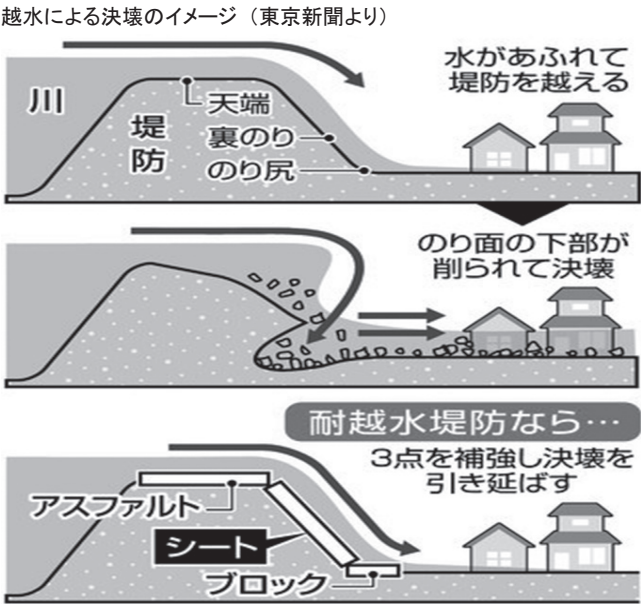
県 耐越水堤防の強化を進める

県は今回の堤防の決壊を受けて、「耐越水堤防の強化」を進めると方針転換しました。

堤防強化は裏のり保護の3点セットで

「耐越水堤防について、末次忠司(山梨大大学院教授)は、浸食を防ぐため堤防の裏のり(住宅地側のり面)をシートで保護し、天端(堤防上面)とのり尻(住宅地側のり面下部)を補強する工法(下図)を評価しています。

昨夏の西日本豪雨で天端とのり尻の二点を補強した小田川(岡山県)の堤防が決壊しています。そのため、裏のり保護の3点セットが不可欠です。



夏井川は、昭和52年の洪水を契機に改修に着手しています。

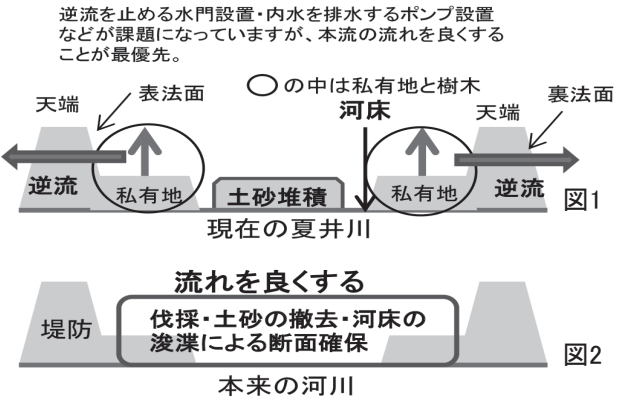
上表は、河川改修計画の内容です。基本方針は将来的な整備計画の姿で、計画は目標達成期間を概ね30年としています。河川改修は、昭和7年から始まり、86年が経過しています。昭和52年からは40年以上経過していますが、目標実現までは至っていません。

県民の安全を優先した廃炉を

原発事故から10年目。いまだに「原子力緊急事態宣言」は継続中です。昨年12月廃炉ロードマップが改定され、廃炉の基本方針に「復興と廃炉の両立」の文言が加えられました。復興という名の新たな「安全神話」の誕生です。廃炉を進めるとしても廃炉の定義は決まっておらず、廃炉の最終形はどういう状態になるのか不明です。しかし、廃炉

の期限(30～40年)は維持しています。デブリの取り出しを2年後から始めるとしています。労働者の多量の被ばくと外部への拡散なくしては不可能です。デブリの処理・処分、受け入れ先も決まっていません。使用済み核燃料を金属容器に入れて「乾式貯蔵」による管理の後、県外に搬出する予定ですが、受け入れ先は

夏井川整備方針(福島県)		
整備基本方針	平成13年策定	
計画雨量mm/2日	327	鎌田橋基準点
計画流量m³/s	3,800	河道内2,200 洪水調整施設1,600
整備計画	平成14年策定	
実績雨量mm/2日	280.2(S61豪雨)	鎌田橋基準点
計画流量m³/s	2,200	河道内



私有地の買収が不可欠

上図1のように、どこの河川も土砂の堆積と樹木が繁茂しています。その要因は河川内の未買収の私有地(堤防を補強している面もある)とも言えます。流下能力に影響のあるところは、私有地の買収を優先して、上図2のような本来の河川の姿に戻すことが不可欠です。

流量確保の対策を

台風19号の降雨量は、夏井川(矢大臣284mm、神楽235mm)を記録、好間川の上流は400mmを超える雨量を計測しています。

計画流量2,200m³/s、1500m³/sを不足しているところ(夏井川整備方針参照)は早急に流量を確保する対策が必要です。

また、洪水調整施設(1,600m³/s)、調整池等の整備も急がれます。雨量が飛躍的に多くなっている実態に合った対策が急務です。

なく、高レベル廃棄物を10年以上地下に埋設処分できる地震・地下水などにより安定した地層は、国内には見あたりません。原発敷地内に永久的に管理保管することが現実的で、県民の安全を最優先するためには、第一原発の事故炉は解体せず管理保管することです。これが放射性物質の拡散を防ぎ、被ばく労働を最小にし、国民負担を最小にすることになります。第二原発も解体はやめるべきです。